

# 愛着に問題があるケースにおける保育士の役割

森 定 美也子

## 愛着に問題があるケースにおける保育士の役割

### The role of nursery teacher in case of attachment problem

森定 美也子

Miyako Morisada

#### 要約

虐待ケースにおいて愛着に問題のあるケースは多く、愛着障害という用語が使用されることも多い。乳幼児が虐待を受け、愛着が安心型でなくても、虐待による親とのネガティブなトラウマを、その後に関わる施設職員や、里親、保育士、先生などの「育て直し」によって癒し、安心型アタッチメントを形成することができる。家族以外の様々な人との関わりが、虐待による悪影響を跳ね返す力となるのである。このような育て直しは、日々の保育の中で行うことが可能である。本稿では、愛着に問題がある子どもへの保育士の役割や、愛着が獲得される過程における子どもの変化について、創作ケースを通して紹介した。また、このケースを通して、虐待を受けた乳幼児と愛着関係を作り、安全基地になる上で欠かせない能力「メンタライジング」の重要性について論じた。

#### はじめに

Bowlby (1969)は、乳幼児が不安や怒りなど否定的な感情に陥ったとき、養育者に近づいて安心感を得ようとする一連の行動を「愛着」と定義した。乳幼児は、親から虐待を受けると恐怖や痛みによる苦しみから、否定的な感情が呼び起こされ、愛着が活性化する。しかし、安心感を与えてくれるべき親から虐待を受けているため、愛着行動は成立せず、乳幼児は大きなトラウマを抱えることとなる。

Bowlbyは、ロンドンのチャイルド・ガイダンス・クリニックで児童精神科医として勤務していたが、このクリニックは、非行少年等を保護して精神医療的な治療を行う機関であった。Bowlbyは、盗みを繰り返す非行少年のなかでも、養育者に情緒的な関心を持たないように見えるケースに注目した。このような特徴を持つ非行少年16人のうち、14人が、3歳までに親に捨てられたり、死別したりなど、幼少期に親子関係の崩壊を経験していた。残る2人も、親が精神病で親子関係が不全なケースであった。

Bowlbyは、これらのケースを通して、幼少期の親子関係が子どものパーソナリティ形成に与える影響について指摘している。親からの愛情や安心感を受けとることができず、また、親から敵意やアンビバレントな感情を向けられることが、子どもにどう影響を及ぼすのかについて詳しく述べ

ている。これは、現代の子どもの虐待における幼少期の愛着のトラウマ問題に対応するものであった。

#### (1) 二つの愛着障害

虐待ケースにおいて愛着に問題のあるケースは多く、愛着障害という用語が使用されることも多い。しかし、実際に DSM-5 によって医学的に定義されている二つの愛着障害、「反応性愛着障害」と「脱抑制型対人交流障害」は、診断基準が厳しく、重度のネグレクトを受けた子どものなかでも、10~20%程度であると推測されている。

反応性愛着障害の基本的な特徴は、養育者に対して情緒的な関わりが欠如している、または、著しく未発達であるという点である。養育者に対して安心を示し、愛情を求めよう場面でも、自ら求めることはない。また、養育者が抱っこのような情緒的な交流をしようとしても、ほとんど反応を示さない。うつに陥っているかのように、誰とも関わらない。喜びや悲しみ、愛情のような肯定的な感情は抑えられており、恐怖、悲しみ、いらだちを感じることも多いため、感情調節能力が働かなくなっている。

これに対して、脱抑制型対人交流障害の基本的な特徴は、見知らぬ人に対して躊躇なく近づく反面、養育者に対して後追いをすることはなく、養育者がいなくなっても、最初

からいないかのように振る舞う。ADHD の特徴と重なるところがあるため、診断は難しいとされている。鑑別のポイントは、脱抑制型対人交流障害は、著しく不適切な環境が必須条件であること、必ずしも多動や不注意を示さないこと、辛い記憶を忘れるなどの解離性障害が見られる点である。一方、ADHD は特定の他者に愛着を求めることができる。

このように、反応性愛着障害と脱抑制型対人交流障害は、診断基準が厳しく、確定診断に至るケースは多くはないが、これらの特徴は、虐待などで愛着の問題を持つケースによく見られるものである。

## (2) 獲得安心型アタッチメントについて

Main(1990)は、成人のアタッチメントの内的作業モデルを測定する研究を通して、虐待を受けてアタッチメントが安心型でなくても、親以外の人、先生や恋人などと安心を伴うアタッチメントを形成できれば、安心型のアタッチメントを獲得できることを明らかにした。これは、獲得安心型のアタッチメントと呼ばれる。虐待による親とのネガティブなトラウマを、その後に関わる施設職員や、里親、保育士、教師などの「育て直し」によって癒し、安心型アタッチメントを形成することができるのである。

Bifulco ら(2013)は、成人のアタッチメント研究において、幼少期に親から虐待を受けたが、もう一人の親が安心なアタッチメントを与えることができたため、成人後も、自分の子どもに対して虐待の世代間伝達をしなかったケースを紹介している。また、家族のなかで虐待を受けていても、友人の親から安心を伴うアタッチメントを与えられ、それを通して人とうまく関わる力を身に付け、子どもを持ってからも虐待を行わなかったケースも紹介している。このことから、虐待の世代間伝達を断ち切り、虐待によるトラウマを癒す上で、安心をもたらすアタッチメントが大切な役割を果たしていることがわかる。家族以外の様々な人との関わりが、虐待による悪影響を跳ね返す力となるのである。

このような育て直しは、日々の保育の中で行うことが可能である。愛着に問題がある子どもに対する保育士の役割や、愛着が獲得される過程における子どもの変化についてケースを通して紹介する。以下のケースは、筆者が保育園の巡回相談で経験した複数のケースをもとに創作した、愛着に問題のあるケースである。

## (3) 愛着に問題を抱えるB君

### <家族構成>

父(自営の飲食店勤務)、母(父の飲食店を手伝う)、兄A君(5歳)、本人B君(3歳)の4人家族。近所に母方祖母が住んでいるが、母との関係は悪く、非協力的である。

### <B君の生育歴>

父は厳しい家庭に育ち、体罰を受けていたという。B君が1歳半の時、父が事業に失敗し、父とA君、母とB君で離れて暮らすようになった。母は働きながらB君の面倒をみるのが出来ず、母方祖母を頼ろうとするが、祖母がB君の受け入れを拒否したため、B君は乳児院に入所することになった。2歳を過ぎて乳児院から養護施設に移った時、父もA君の面倒をみるのが出来なくなり、A君も同じ養護施設に入所した。B君が3歳6カ月の時、父が母とともに新たに飲食店をはじめ、暮らしのめどが立ったため、二人を引きとった。B君は3歳から兄のA君とともにZ保育園へ通園することになった。

A君は施設でいじめを受けており、保育園でも次第に乱暴な言動が目立つようになった。また、母親の話から、父はA君やB君にひどい体罰を受けていることが分かった。A君は自分の遊びに他児が入ってくるのを極端に嫌い、カッとなって怒ることが多い。A君、B君共に保育士と1対1の関わりを増やすようにして対応することになった。

### 【3歳6カ月から4歳】

B君は、思うようにならないと大声を出したり、他児をたたいたりする行動が見られる。普段関わりのない保育士が側に近付くと、警戒し、固まる。安心が出来ない様子である。遊ぶ時は一人が多く、他児が入ってくると「バカヤロー! あっちいけ!」と追い払う

保育士がB君と関わろうとすると「バカヤロー!」と威嚇したり、「こないで」とおびえたり、気持ちが突然変わる。他児に手を出して叱られると無表情になり、「Aもやっぺんじゃねーか」と兄を引き合いに出す。母によれば、家では兄に叩かれている。

### 【4歳から4歳6カ月】

他児とトラブルになると、「こっちくん!」「ムカツクんだよ!」と暴言を言ったり暴力をふるったりする。保育

士は、そのようなときは無理に近づかず、落ち着いた頃に話をするようにしている。クラスの子どもはB君を怖がって周りに寄り付かない。

母によれば、父の子どもに対する暴言、暴力がひどい。しかし、母は「かばうことはできない」という。母は、B君を叱る時、「父に叱ってもらうよ！」という態度で接しているため、B君も不安定になってしまう。

B君が4歳4か月の時、母が第三子を妊娠した。望まれない妊娠であった。妊娠によって母の体調が安定しないためか、B君は小さい子の頬をいきなりつねるなど、攻撃性が出し方が陰湿になり、急に笑い出すなど、情緒的にも不安定な様子が見られる。兄のA君も落ち着かず、運動会の練習などのクラスの活動に参加することができない。

4歳5か月の時、母と父が不仲になり、母は父の店の手伝いをやめた。母が不安定になったため、地域の保健所の保健師が母と面談を行った。父とのトラブルの話ばかりで、子どもの話は出なかった。母は離婚を希望し、保健師と母子寮のことを相談した。

B君の太ももに、長い靴べらで叩かれた赤い跡を担当が見つけ、お昼寝中にその写真を撮った。あざについてB君は、「痛くない」という。園長先生があざについて母と話をした。母は「父の顔色が変わるまで怒らないと、子どもはわからない。保育園でも、もっと厳しく叱ってください」という。園長先生は子どもの心に反発が出てしまうので、暴力はいけなことを話す。園長先生は児童相談所に連絡し、担当者が来園した。あざの写真を見せて説明し、B君は児童相談所の経過観察ケースとなる。

#### 【4歳6カ月から5歳】

担任に甘える姿が見られるが、甘えるように担任の首に手をまわし、そのあと「死んでもいいんだ」と言いながら首を絞める。食事や着替えも手伝ってもらいたがり、昼寝の時も「背中を搔いて」と甘えてくる。担任も「B君と目が合うようになってきた。話が伝わっている感じがする」と関係ができていことを実感していた。他児への暴言や暴力は続いており、そのことで母に叱られて失禁してしまうこともあった。

4歳8か月の時、ブランコから落ちて右ほほを骨折した。母は「余計なことをしてくれて」と痛みをわかってあげようとしなかった。担任に対して、「来るんじゃねえよ」とけ

ん制したり、自分だけを見てほしいと要求したりと両極端なコミュニケーションをみせている。

兄のA君の就学予定の小学校が、A君の多動の問題から、普通学級での受け入れに難色を示し、両親とも兄のことにかかりきりになる。兄はその事で荒れてB君に暴力を振るうが、B君は乱暴されても我慢している。担任に対しては、「抱っこやおんぶして」など甘えが見られる。B君は、クラスの男児が転園する時、その男児に「もう来んな」と言った。担任は「そういう言い方をすると、言われた方が悲しむよ」とB君と話した。その後B君はソワソワして、最後にその男児に「元気だね」と声をかけることができた。

母は担任や園長先生に対して、子育てのしんどさを語るようになった。母は子どもといることが嫌であり、1か月後に迫った第3子の出産に対しても不安な気持ちを抱えていた。父は靴べらで子ども達を叩いている。母はB君が乱暴であることを気にして、保育園をお休みすることがあるので、担任は「気にせず、連れてきてください」と母にお願いをしている。

#### 【5歳から5歳6ヶ月】

母が第3子の男児を出産した、母の入院中に、B君の右手の手のひらにタバコの火を押し付けられたような水泡ができていた。担任がその事についてB君に聞いたところ、「タバコの火が熱かった。パパがつけた」と言ったため、母にその事を話した。母は慌てた様子で「鉄棒をやっているときにできた豆がつぶれたのでは」という。その後B君が「自分でタバコの火をつけた…」と言うなど、言っていることが二転三転する。

兄は保育園の隣の小学校の普通学級に進学したが、適応が難しく、兄のことで夫婦喧嘩が絶えない。母によれば、B君は父に顔や頭を殴られたりしている。母はそれを止められない。父はカッとなると暴力を止めることができない。

保育園のない日曜日に、B君と兄が保育園の柵を乗り越えて園内に侵入した。母は園長先生に相談し「どうしたらいいんですか!」と困り果てていた。母は問題に直面すると、怒りが子どもに向き、B君はそれを受けて不安定になって、表情が無くなってしまう。

担任には甘えを見せ、母が迎えに来て「先生といる」

と担任におぶさる。担任が母に「おんぶしてあげてください」と母にお願いすると、母は「本当にするの？腰がいたくなる」といいつつ、B君をおんぶして帰る。しかしその後、B君が家に帰りたがらないことが続き、母が迎えに来ないことがあった。その時は、園長先生が家まで送っていった。母によると、B君が弟に「殺してやる」といい、母はB君を叩き、お迎えもやめたのだという。園長先生は、「母がお迎えに来ないと、B君が見捨てられた気持ちになり不安になるので、お迎えに来てほしい」とお願いした。保育園でB君は「ママが好き」という反面、「怒るから嫌い」と言い、母に怒られたことは「わからない」と言って、記憶が抜けている。B君が他児に乱暴し、母が園に呼ばれて家に連れて帰ることになった日、母は「憎たらしい。赤ちゃんを一人で家に寝かせて迎えきたんだ。もう迎えにこないよ」とB君を叱っていた。

B君は担任に甘える反面、担任の腕に爪を立て「お前なんか死ぬ！」という。つめを立てるのに満足すると力が抜ける。担任が「人を傷つけてはいけませんよ」と諭すと、「いいんだよ！」と言り返す。

B君は新任の先生に対して叩いたりつねったりする。新任の先生が「どうしてそんなことをするの？」と聞くと、B君は「壊してやりたいんだよ」と答え、鉛筆を振りかざし「刺してやる！」と言う。担任が「やめよう！」と注意すると、「自分の首を刺す！」と言う。担任がB君を抱き締めて「痛くて苦しいのがいいならやりなさい！」という。B君の力が抜けた。担任が「B君を傷つけることはさせない。私が守るよ」というと、B君は脱げ殻のように放心状態になり、何もなかったかのように穏やかになった。

\* 母は出産間近の自分の不安でいっぱいであり、担任に自分の不安を語る事ができたことは良かった。担任も、母の対応について注意する前に、母の気持ちに共感して話を聴いている。

\* B君は、親との間で基本的な信頼関係や、安定した愛着を結ぶことができていないので、心の基盤が沼地のように不安定になっている。そのような状況でも、B君は懸命に担任に愛着行動を示し、安定した愛着を求めていることが分かる。ただ、愛着を求め一方で、攻撃を示して「試し行動」を行うなど、アンビバレントな様子が見られる。

\* 新任の先生に向けられた試し行動は、組織の中でも弱い立場の人が攻撃対象となる。「守るから」と言う担任の真

剣な姿勢に、B君も初めて安心を感じたのだろう。

#### 【5歳6ヶ月から6歳】

B君の暴言が少なくなり、少し落ち着いた。時々赤ちゃんのような子ども返りをする。B君は担任の膝の上に座って、動物の家族愛の絵本を読んでもらうことを好むようになる。そのようなときに他児が来るのを拒む。

B君が母に「ママのお弁当おいしい」と話しかけているのに、母は「先生の言うことを君と聞いた？」と返事をするなど、母がB君の言うことを聞いておらず、嘔み合わないやり取りが見られる。母はB君のマイナス面ばかりを指摘する。B君は運動会のダンスに意欲的に取り組み、できたときはいい表情をしていた。担任はその事を母に伝え、B君の頑張りを誉めてもらうようお願いした。

B君は病気で寝ていて泣いているウサギの絵を描き、「誰にもあげないで」と言って、担任にくれた。また、母とB君、兄と赤ちゃんの蛇の絵を描くが、父の蛇は描けなかった。B君が顔に怪我をしたときに、母が「ざまあみろ」と言ったと連絡帳に書いてきた。その事で園長先生は母と話をし、子どもに言うてはいけない言葉であると伝えた。

母は団地の公募の申し込みに当選し、引っ越すことになったが、園は変わらないことになった。B君は担任に「俺が引っ越すと寂しい？でも、ここにいるから大丈夫」といって、担任に抱きついて心地良さそうにしていた。

引っ越し後、電車で40分かけて母は兄を小学校にB君を保育園に送り迎えしていたが、赤ちゃんが気管支炎になり、入院することになった。父は兄とB君の送迎をしにくれず、兄とB君は家で父に怒られ続けていた。このような状況の中で、二人はコンビニで2回万引きをしてしまった。母が問い詰めてもB君は話そうとせず、兄が万引きの事実を話した。母から園長先生に相談の電話があり、園長先生は、B君を園に通わせる大切さを伝えた。

赤ちゃんが退院して、B君は一ヶ月ぶりに保育園に来た。ふらふらして落ち着かない様子であった。母が保育園を休ませようとした時は、「休みたくない！」と大泣きして、保育園に連れてきてもらった。

父の子ども達への暴力が増えたこともあり、母は離婚を考えるようになる。父の暴力について、B君は「あいつはアアアアいいながら叩くんだよ」と担任に話す。母の連絡

帳には「Bはものすごい腹のたてかたをする。泣き止まない赤ちゃんを『うるせえ!』と叩く。それを見ていた兄に叩かれ、自分は何もしていないのに兄が叩いたと言いつ張る。」と書いてあった。

B君は何人かの保育士に、制作したものについて「どちらが好き？」と聞き、どちらか一方を答えると、「じゃあ、こっちは嫌いなんだ」という否定的な捉え方を繰り返している。担任に対して、以前のように近づいては離れるというアンビバレントな様子に変化し、担任にスキンシップをしながら少し甘えられるようになった。

\* 保育園に来ることができなくなったことで、保育園という枠が崩れ、これまで保育園が受け止めていた、B君の抱える不安やイライラを出すことができなくなった。それが万引きと言う形ででたのだと考えられる。

#### 【6歳から6歳6ヶ月】

母は離婚をして、3人の子どもたちと共に母子寮へ入った。兄は転校したが、B君は母子寮近くの保育園に空きがなく、園を変わずに済んだ。赤ちゃんのC君は母子寮近くの保育園に入った。B君は母子寮での生活に慣れ、父の暴力から逃れたため、精神的に安定してきた。離婚後も父は時々保育園の送り迎えをすることがある。

他児に対しては、「うちはパパもママも叩くんだよ」といいながら、叩いてしまう。「どかねえからぶん殴った」と言うなど暴言暴力はあるが、保育士には「言っても聞いてくれない」と弱い自分を演じるなどの二面性が見られる。よい自分も見えてほしい気持ちが出てきている。

運動会で使うボンボンを母と一緒に作ってくれなかったため、B君はイライラして、母と一緒に作った他児に対してあたる。母にプールの用意をしてもらえなかった日、他児の描いた絵を黒く塗りつぶしてしまう。

ブンブンこまの制作では、「つまんねえ、やりたくねえ」といいながらも、兄の分まで作っていた。

担任には兄からの暴力について話し、抱っこなどのスキンシップを求め、気持ちを安定させている。3歳の部屋で「お兄さん」と声をかけられ、三歳児の着替えを手伝う姿が見られる。他児のおもちゃを取ってしまった三歳児に対して「俺もお兄ちゃんから蹴られたり、叩かれたりしたらすごい嫌な気持ちになるんだ。分かる?!」と諭す。

\*父の暴力があった頃は、保育園でよい関わりを体験して

も、家に帰って暴力にあって、よい関わりが体験が流れてしまうという「底に穴が開いたバケツ」のような状態であった。しかし、離婚によって父の暴力がなくなったことで、保育園でのよい関わりがB君の中に蓄積されてきた。安定した愛着が持てるようになり、つらい体験などを言葉にできるようになってきている。

#### 【6歳から6歳9ヶ月】

母が遠足のお弁当を作ってくれたことが嬉しく、他児のお弁当を誉める。同じクラスの子とトラブルになったとき、B君は拳を握りしめて叩き返すことを我慢した。電車ごっこをして、友達に先頭を譲るなど、気持ちにゆとりが出てきた。B君の気持ちが出てきている荒れたときに、落ち着かせてくれる担任の言葉を使いながら、友達同士のトラブルを仲裁する姿が見られる。母はB君を誉めないの、保育園全体でB君の良いところを誉めていくように配慮されている。

お礼をきちんとするなど、「良い子」の面が成長し、保育園で評価されることで、暴言暴力をしたい気持ちのコントロールが少しずつできるようになった。

友達に暴言を言ったあと、担任から「よく考えるように」と注意を受け、自分で考えて友達に謝ることができるようになった。卒園お祝い会で友達を慰める姿が見られる反面、暴言を言うこともあるが、クラスの友達はB君の良い面を評価するようになった。

\*保育士がB君の葛藤を根気強く言葉にしてかかわったことが、B君の心の中に取り入れられ、自分や他児のトラブルの解決方法として用いられている。トラブルに関してどのように解決するかという方法が、保育士からB君へ世代間伝達されたことが分かる。

### (4) 代理養育者の役割

虐待を受けた乳幼児がより早い段階で保護され、代理養育者となる保育園や施設の保育士や職員、あるいは里親のもとで安定した愛着を育むことができることは、虐待の精神的なリスクを少なくする上で大変有効である。虐待を受けた子どもを支援する上で大切なことは、その子どもにとっての安全基地になることである。そのためには、B君のケースの担任の先生のように、その子に対しての批判や

評価をすることなく、ありのままの状態を受け入れ、安定した愛着関係を結ぶことが大切である。

また、虐待を受けた子どもは、B君のケースのように暴言や暴力が多いが、これらを客観的にとらえ、その暴言や暴力の背後にあるその子どもの不安や葛藤を読み取っていくことが大切となる。虐待を受けた乳幼児と愛着関係を作り、安全基地になる上で欠かせない能力として、イギリスの精神分析医 Fonagy が提唱した、相手の行動を理解する能力、「メンタライジング」が挙げられる。これは、相手に心があることを想定し、それに基づいて、相手の行動を理解する能力である。特に他者との関係において、相手や自分の心を理解する能力であり、共感や洞察も含まれる。言い換えれば、自分の思いや欲求にのみこまれず、相手の気持ちや自分のふるまいを客観的に見る力で、一生を通じて発達し続ける能力である。この能力のためには「自分を振り返り、内省する力」や、「相手の気持ちをくみ取る共感する力」が必要となる。

このようなメンタライジング能力の高い人は、自分の感情に流されず、事実を客観的に判断し、行動することができる。安定した愛着を持つ人は、この能力が高い。子育てにおいて、安定した愛着を持つ親は、メンタライジング能力を駆使して子どもの気持ちを読み取り、子どもの求めている対応を行うことが出来る。このような関わりを基礎として、安定した愛着を持つ子どもが育つのである。

虐待による不安定な愛着は、子ども時代だけではなく、思春期や成人期に問題行動や心の病気などの形で現れる。成人してからも、ストレス耐性や社会適応力が低く、傷つきやすく、物事を否定的に考えるパーソナリティを有することになる。不安定な愛着は、一生を通じて影響を及ぼすのである。保育士などの代理養育者が、愛着に問題のある乳幼児をメンタライジング能力を用いて「育て直し」、安定した愛着関係を作り直すことは、その子どもの一生を左右する重要な役割であるといえる。

### <引用・参考文献>

青木紀久代 2017 愛着（アタッチメント）理論の成り立ちと発展 精神療法第 43 巻第 4 号— 愛着障害 — 金剛出版

青木 豊 2017 愛着とトラウマに焦点を当てた乳幼児の

精神療法 精神療法第 43 巻第 4 号—愛着障害 — 金剛出版

Bifulco A. & Thomas G. (2013) Understanding Adult Attachment in Family Relationships. Pp 53-54 London Routledge. (吉田敬子・林もも子・池田真理監訳 (2017) アタッチメント・スタイル面接の理論と実践—家族の見立て、ケア介入. 金剛出版)

Bowlby J. (1969, 1973, 1980) Attachment and Loss. Vol. 1, 2, 3. Hogarth Press

林 もも子 2017 成人アタッチメント研究の臨床的意義 精神療法第 43 巻第 4 号—愛着障害 — 金剛出版

John G. Allen , Anthony W. Bateman , Peter Fonagy 2014 メンタライジングの理論と臨床: 精神分析・愛着理論・発達精神病理学の統合 狩野 力八郎 (監修), 上地 雄一郎 (翻訳), 林 創 (翻訳), 大澤 多美子 (翻訳), 鈴木 康之 (翻訳) 北大路書房

Main M & Solomon J. (1990) Procedures for identifying infants as disorganized/disoriented during the Ainsworth strange situation . In :Greenberg M T, Cicchetti D & Cummings EM (Eds) Attachment in Preshool Years. Pp121-160. Chicago. University of Chicago Press.

岡田 尊司 2016 愛着障害の克服 「愛着アプローチ」で、人は変えられる 光文社新書

Peter Fonagy 2008 愛着理論と精神分析 遠藤 利彦 (翻訳), 北山 修 (翻訳) 誠信書房

山口貴史・細金奈奈 2017 反応性愛着障害と脱抑制型対人交流障害 (DSM-5) の概念と診断 精神療法第 43 巻第 4 号—愛着障害 486—491 金剛出版